白沙四方街に面する商店建築の保存

－中国世界遺産麗江旧市街白沙集落において－

A STUDY ON THE CONSERVATION OF COMMERCIAL BUILDINGS
LOCATED IN SIFANGJIE SQUARE IN BAISHA

Baisha housing cluster, World heritage site of the old town of Lijiang (China)

河 原 洋 子*

Yoko KAWAHARA

The World Heritage site of the old town of Lijiang is composed of three areas: Dayan old town and Baisha and Shuhe housing clusters. As one of the important features characterizing the value of the site, the squares called Sifangjie are found in all three areas. Although the design and visual integrity of the traditional shop fronts facing onto the squares are very important conservation indicators, many of those in the Dayan old town and Shuhe Sifangjie squares have been modified to open-type shop fronts to accommodate modern commercial uses; however, in the Baisha Sifangjie square the traditional shop front design in the dominant window and door style -- the Pubanmen style -- still remains. This paper aims to describe the current situation and the changes in Baisha Sifangjie and to study the conservation of commercial buildings. This was done mainly by examining the commercial buildings and by conducting interviews with the local residents.

Keywords : World Heritage, Conservation, Cultural Properties, Lijiang

世界遺産、保存、文化財、麗江

1 はじめに

1997 年第 21 回世界遺産委員会でユネスコ世界遺産に登録された中国麗江旧市街^{注1)}は大研古城、白沙、束河の 3 地区から構成される。中国政府が提出した世界遺産審査のための推薦書やこれに対するイコモス評価書では、3 地区に共通する特徴として四方街と呼ばれる歴史地区の中心に位置する矩形形状の広場が周囲の建物と共に遺産価値を形成する要素として挙げられている^{注2)}。四方街の広場に面する建物の歴史的な外観の保存は重要であるが、大研古城と束河では大部分の建物が観光客向けの飲食店や土産物屋となり、ファサードは大きく変化してしまっている。

2007 年第 31 回世界遺産委員会における世界遺産一覧表記載物件の保全状況審査では観光が遺産価値に及ぼした負のインパクトが指摘された^{注3)}。ユネスコ及びイコモスの専門家による視察報告書では、地域社会の生活様式の変化と居住する少数民族である纳西族の文化の商品化が遺産の真正性（オーセンティシティ）を損なう要因とされた^{注4)}。文化の商品化するなか観光化に頼らない地域社会の維持は麗江の遺産保護における大きな課題といえる。

以上のような背景の中、白沙の四方街には外部からの観光客を対象としない住民向けの一般商店がいまなお存在し、伝統的なファサードが比較的良好に残っている。世界遺産麗江旧市街における建物の伝統的な外観の喪失は、従来の伝統的意匠を継承する店舗あるい

は住宅が観光客相手の開放的な店構えを持つ飲食店や土産物屋に改造されていく過程で顕著となる。白沙四方街において、現状を分析、伝統的意匠の店構えが開放的な店構えに変わっていく過程を検証し、問題を把握することは、世界遺産麗江旧市街において、その保存程度を計る重要な尺度となる店舗ファサードの今後の保存計画を立案するうえで必要である。しかし、白沙の四方街に関する研究は非常に少なく、商店建築の伝統的なファサードの変遷の過程を具体的に取り上げた事例研究も筆者が把握する限りでは行われていない。

そこで本論文は白沙四方街における商店建築の現状と変遷およびファサードの保存状況を明らかにし、その保存のための考察を行うことを目的とする^{注5)}。方法は建物の実測調査と住民からの聞き取りを中心とした。現地調査は 2007 年 11 月～2008 年 7 月に実施した^{注6)}。

関連する既往研究には、筆者等による白沙の民家に関する調査研究がある^{注7)}。纳西族の民家に関する文献はあるが、白沙四方街に面する個々の建物に対する詳細な説明はない^{注8)}。麗江における世界遺産登録後の文化資源と観光開発に関するまとまった研究は山村高淑氏により始められ、大研古城を主な対象に観光化が社会や空間に与える影響のデータベース化が進められている。その中で大研古城の四方街を含む一部の歴史地区におけるファサードの変更についての記録は報告されているが、詳細は述べられていない^{注9)}。

海外歴史地区の建物に現れる変化を保存に関連付けた研究として

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻
博士課程・修士(文化財)

Graduate Student, Dept. of World Cultural Heritage Studies, Graduate School of
Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, M. Cultural Properties

は西安市四合院民家の住環境と保存の問題を取り上げた大西ほか（1994）^{注10）}、ヴェトナムホイアン歴史地区の商店化によるファサードの変化を記録分析した内海ほか（2001）^{注11）}等がある。

2 四方街の現状

2.1 四方街とその周辺

白沙四方街の周辺状況を図1に示す。四方街は三元村を南北に走る白沙通り^{注12）}の南端に位置し、全長約50m、南側は15m、北側は10m程度の台形の形状で、そこより南は街尾村である。四方街から北の白沙通り沿いには、白沙宗教建築群の裏口に続く路地との交差点まで観光客向けの飲食店や土産物屋が連なっているが、そこから北手は観光客向け店舗がなくなり、観光客の往来はほとんど見られない。観察によると、観光客の多くは宿泊地である大研古城方向から自動車道を利用して白沙を訪れ、土産物屋や飲食店等が並ぶ観光客向けエリアで過ごした後に自動車道に戻っており、その動線は限定されている。農家の住宅地である街尾村方向に行く観光客も少ない。

図1 四方街周辺

2.2 建物

図2は四方街に面する建物の1階平面図である。四方街南端に建つ中央の1間が通路である楼門を南1号とした。南1号の東側には二階建の店舗、西側には全長約15mの平屋の空き家が接しているが、南1号と構造を別にし、全面が四方街に面さないため考察対象の建物に含まないこととする。東西列は南より東1号、西1号として順に棟番号をつけた。東1号は間口9間で、間ごとに所有者や利用者が異なるため、1～9の戸番号を設けた。東1号～1～6は水路側に増築されており、図には増築前の範囲を示した。各戸の1階床面積は約14㎡である。

四方街に面する建物のうち一階建は2棟（西2号、東2号）、三階建は1棟（南1号）があるが、二階建はその他の5棟で最も多い。筆者等が先に実施した街尾村の民家の調査結果では建物の桁行き方向の柱間数は3間が標準であったが^{注13）}、東1号、西1号、西2号は各9、5、2間となっている。西1号、西3号、西4号、西5号は背後に中庭を有し、その周囲には住居、納屋、厨房が配置されている。麗江の民家は中庭の周囲に建物が配置される合院式住宅が一般的であるが、東1号、東2号、西2号は中庭を有していない。東2号は背後に接する合院式住宅と所有者を同一とするが、接する建物とは

通じておらず、四方街側からの出入りとなっている。西2号の出入りも四方街側のみである。

図2 1階平面図

2.3 建物の利用状況

表1の左欄は現状における各棟あるいは各戸の利用状況である。聞き取りは主に利用者に対して行った。東1号～3・4の利用者は2間分を使用しているが、他は1間ごとに利用者が異なっている。なお、東1号～2の利用者は東1号～1の背後の増築部も使用している。

建物の種類は、専用住宅、店舗、店舗その他の併用住宅（以下、「併用住宅」という）に分類した。専用住宅は東1号～1のみである。東1号の併用住宅は、営業は1階で行われ、所有者または借り主が2階に居住している。現地観察による主な客を営業の対象者として分類すると、「住民」は6件、「観光客」は5件、「住民・観光客」は2件、不明1件となる。営業の対象者が「観光客」の業種は東1号～6を除き全て飲食店で、英文のメニューが用意されている。東1号の飲食店2件は観光客も見られるが、住民が多く利用しているため「住民・観光客」とした。四方街は白沙の中心であると共に観光街の入口であり、最も観光客向け店舗が集中しやすい場所であるが、住民を主な対象とした店舗が半分を占めている。これらが扱う商品やサービス内容は住民生活に即しており、ほとんどが観光客向け飲食店や土産物屋である四方街より北の観光客向けエリアと比較し多様である。

営業を開始した時期は2000年以降が多く、所有者自身の営業は6件、賃貸は8件ある。東1号～5は東1号～6に住む所有者から無料で借りており、借家件数に含んだ。借り主は、大理から移住した1件を除けば、白沙や東河に居住する地元住民となっている。

本調査期間中に新たに開店した店は2件である。南1号の2、3階部分は四方街より北の観光客向けエリアの飲食店経営者が既存店舗に加え2008年5月に開業した飲食店であるが、それ以前は使用されていなかった。西2号は観光客向けエリアで営業していた菓子店が賃貸料の安さを理由に移転してきたが、それ以前は簡易な医療処

表 1 利用状況

棟/戸	現状							解放（1949 年）前		
	間数	階数	建物種類	業種等	対象者	営業開始年	所有（借り主所在地）	建物種類	業種等	証言者
南 1 号	3	3	店舗	飲食店	観光客	2008 年	借家（白沙）	工作物		C 他/
西 1 号	5	2	店舗	小売店（麗江市合作社）	住民	解放前	持ち家	併用住宅	小売店（日常品）	A, B, C/A, B, C
西 2 号	2	1	店舗	小売店（菓子）	住民	2008 年	借家（大理より移住）	専用住宅		A, C/
西 3 号	3	2	店舗	小売店（日用品）	住民	1998、9 年	持ち家	専用住宅		A, C/
西 4 号	3	2	店舗	飲食店	観光客	2006 年	持ち家	併用住宅	飲食店（茶・酒）	A /C
西 5 号	3	2	店舗	飲食店	観光客	2005 年	借家（東河）	専用住宅		A, C/
東 1 号－1	1	2	専用住宅	住居			持ち家	併用住宅	サービス（靴修理）	A, C, D/ D
東 1 号－2	1	2	店舗	飲食店	住民・観光客	2004、5 年	借家（白沙）	店舗*		A/
東 1 号－3	1	2	併用住宅	飲食店	住民・観光客	2001 年	借家（白沙）	併用住宅	飲食店（酒）	A, C / C
東 1 号－4	1	2						店舗*		A/
東 1 号－5	1	2	店舗	サービス（車両修理）	住民	1998 年頃	借家（白沙）	店舗*		A/
東 1 号－6	1	2	併用住宅	玉龍県白沙細楽会	観光客	2002 年	持ち家	併用住宅	小売店（日常品）	A, E/A, E
東 1 号－7	1	2	店舗	未確認	未確認	未確認	借家	併用住宅	小売店（食品）	A/A
東 1 号－8	1	2	店舗	小売店（花輪）	住民	近年	借家（東河）	専用住宅		A/
東 1 号－9	1	2	併用住宅	小売店（農薬・化学肥料）	住民	1999 年	持ち家	専用住宅		A/
東 2 号	3	2	店舗	飲食店	観光客	2003 年頃	持ち家	未建設		

注 1) 現状に関する主な聞取りは 2008 年 6 月 14 日、用途等の最終確認は 7 月 16 日。東 1 号－7 は閉店中。 注 2) 解放前に関する聞取りは 2008 年 3 月 8 日、3 月 15 日、6 月 14 日。
注 3) 解放前の凡例 a)建物種類右上の＊：居住の用途の有無が不明のもの。b) 証言者（聞取り対象者）の区分 A：84 才女性（三元村在住）、B:68 才男性(福国寺住職、街尾村に生家）、C:66 才男性（西 4 号所有者）、D:64 才男性（東 1 号－1 所有者）、E:58 才男性（東 1 号－6 所有者）。年齢は聞取り当時。c)証言者欄「/」の左は建物種類、右は業種等の証言者。

置を行う村の衛生室として利用されていた。

西 1 号、南 1 号、東 1 号の軒先は露天商の野菜売りに開放されており（図 2 参照）、その周囲には常時住民が屯する傾向が観察により確認できた。東 1 号－6 では四方街に向かって古楽が演奏されるため、建物の正面に鑑賞する観光客が停滞する。白沙の四方街は、住民の居住・集まりおよび住民を対象とする店舗により形成される住民生活の場を観光客が通過または停滞することにより両者が混在する空間となっている。

3 四方街の変遷と保存

3.1 中華民国時代の四方街

中華民国時代（1912～1949 年）大研古城は都市の規模や経済的に最も成長したとされており、大研古城の古民家の中から政府が指定した保護民居の約 7 割が中華民国時代の建設である^{注 14)}。中華民国時代は麗江の遺産にとって重要な時期といえる。

白沙四方街に面する現状の建物は中華民国時代後期に現状に近い配置となっており、それらの変遷に対する背景として中華民国時代の四方街の概要を述べる。当時の状況を示す資料が入手できなかったため、解放（1949 年）前の白沙四方街を知る住民への聞取りを行った。その内容を整理し、四方街に面する建物の利用状況をまとめたものが表 1 右欄である。主な聞取り対象者は、解放時に成人していた 80 才代女性 1 名、両親から伝聞した内容を含め当時を記憶する 50～60 才代男性 4 名である。聞取り対象者の詳細は表 1、注 3)、b) を参照されたい。

中華民国時代に栄えた雲南とチベットを結ぶキャラバン隊による物資の輸送路は茶馬古道^{注 15)}と呼ばれている。隊は主に山道を利用したが、隊が通過した都市や村落には中央は石敷、その両脇は馬用に未舗装の古道が大研古城の他にも多く残っている。聞取りによると、白沙を通る隊の経路は、チベットまで繋がる山道から吉祥橋を

渡り四方街に入る（図 1）吉祥橋経路と西方の福国寺付近を通過する福国寺経路があり、納西族は吉祥橋経路、チベット族は福国寺経路を^{注 16)}とっていた。白沙の住民がチベット族の商人を自宅に泊めるなどの交流もあったというが、チベット族の隊は白沙四方街へはほとんど立ち入らず、四方街は納西族の場であったという^{注 17)}。

大研古城の賑わいを伝える当時の描写や四方街が人で溢れた写真が残されている^{注 18)}。しかし白沙は、旧暦 1 月 20 日の現白沙宗教建築群内にある大宝積宮の一般参詣日以外は静かな村であり、四方街の人の集まりは多くなかったという^{注 19)}。

解放前の四方街に面する建物の利用状況を確認する。表 1 より西 1 号は日用品や塩、涼粉と呼ばれる麗江特産の食品を販売する小売店、西 3 号と西 5 号は専用住宅であった。西 4 号は現所有者が生まれた 1942 年に建設され、その後は現所有者の父の経営で茶や酒を提供する飲食店であった。敷地区画は現状と同じであるが建物は西 4 号のみであったため、西 4 号は併用住宅となっていた。東 1 号は 1 戸ごとに利用者が異なり、南側の 7 戸は店であった。東 1 号－1 では依頼に応じて革製品の修理をしており、キャラバン隊の商人も靴修理に訪れた。東 1 号－6 では日用品、東 1 号－7 では涼粉などが販売されていた。東 1 号－2、4、5 は具体的な商売内容を特定する証言は得られなかったが、東 1 号の商売内容として複数の聞取り対象者が共通して挙げた日用品や食品の販売、または酒場であったと考えられる。更に、四方街の商店経営者のほとんどが農業との兼業であったこと、三元村白沙通り沿いの商店は四方街だけであったこと^{注 20)}が証言された。解放後の四方街の建物は、店舗として利用され続けた西 1 号を除いて次第に農家の専用住宅になったという。

3.2 建具の形状

白沙四方街における建物 1 階部分のファサードを構成する建具には現状において 2 種類の形状がある。図 3 は両形状を有する西 4 号

の中央間とその南側1間に設けられた建具の形状を例として示す。

この地域で歴史的な店舗に用いられてきた伝統的な形状の建具は、図3左側に示すように1間に腰板付き窓と扉で構成される建具である。麗江ではこの形状は「鋪板門」と呼ばれており^{注21)}、本稿ではこれを用い、腰板付き窓と扉で構成される建具を「鋪板門型」^{注22)}とする。

これに対し、近年では図3右側に示すように1間に4または6枚の同形状の扉を設けた建具を有する商店建築が増えている。これらの扉は容易に取り外すことができ、一般的に営業時は扉を外し開放する。本稿ではこの形状の建具を「全屏開放型」^{注23)}とする。

麗江世界遺産管理組織等が作成した伝統的民家の修復手引書では、建具の近代的な意匠および鉄やガラスの使用は不適切とされているが、道路に面する外壁に設けられる全屏開放型は鋪板門型と共に伝統的で適切な形状として使用可能となっている^{注24)}。麗江の民家の特徴には中庭に面する外壁に設けられる彫刻が施された6枚扉の建具がある。この建具は清時代初期の建物にも見られ、「六合門」とも呼ばれてきた^{注25)}。道路沿いの全屏開放型建具は、この中庭側の古い建具と類似する形状であること、ガラス入り框戸等と比較して伝統的に見える外観であることにより修復手引書では鋪板門と共に伝統的とされたと推測できる。

図3 建具形状（西4号）

写真1 建具開放時（東1号）

3.3 建築の時期と改造

表2は、縦軸は棟番号、横軸は時間経過を表し、四方街に面する民家の建築の時期を丸とし、そこから建設後の期間を横線で示している。建築の時期は、聞取り、および目視による木部の古さと全体的な改造のない2階部分の建具形状などから判断した。

解放前に建設された現存する建物は、東1号と西1～5号の6棟である。東1号は木質と造形から最古の建物と考えられる。西1号の四方街側の2階外壁は、板壁の中央に簡易な板戸の窓を設けた東1号の建具と類似していることから、西1号は東1号と近い時期に建設されたと考えた。所有者への聞取りでは西4号は1942年に建設さ

れ、西5号は西4号と同時期に建てられている。これらの2階部分は、西4号はバルコニー、西5号は外開きの窓が設けられ、東1号や西1号と大きく異なる形状が見られる。また、西3号の2階建具は板戸に格子が入っており、東1号・西1号から西4号・西5号への移行期の形状と考え、西3号はこの時期に建設されたと推測した。筆者が行った本地域の建物調査では一般的に同時期に建設された隣接する建物は厚さ700mm程度の土壁の側壁を共有していたが、西1号と西2号の間は各々の土壁の側壁であるため、両建物は順次建設されたと考え、西2号は西1号後の建築とした。

更に、建具の改造時期を同表に示した。△は全屏開放型への改造を表す。聞取りから判明した改造年が最も初期の建物は西1号で、南手1間に設けられた鋪板門型とその他4間の腰板付き窓のみの建具が1982年頃に全て全屏開放型となった。東1号は全て鋪板門型であったが、一部が全屏開放型に改造された。木部の古さが異なる全屏開放型が5ヶ所あり、新しいものは2000年前後の改造と判明したが、古いものは時期が特定できなかった。東1号と西1号のどちらを最初の改造とするかは、西1号は1952年に合作社となっており、改造を先駆したと推測し西1号を最初とした。西3号は1999年に正面建具の全てが鋪板門型から全屏開放型に、西4・5号は2004年頃に腰板付き窓のみが設けられていた中央の1間が全屏開放型に改造された。その他、聞取りで判明しなかった西2号は扉板が西1号、東1号より新しく、1998年春に撮影された写真^{注26)}では全屏開放型であったため、1998年以前の改造とした。全棟が改造前の外観であったと考えられるのは1942～1982年頃までの約40年間である。麗江では1996年2月にマグニチュード7の大地震が起り、翌年12月に麗江旧市街が世界遺産一覧表に記載されたが、それら直後の改造はない。全屏開放型への改造は2000年以降に多くなっているが、全体としては20年間かけて徐々に広まっている。

表2 建築の時期と改造

3.4 現状と改造前のファサード

図4の上段は四方街から見た東西列における1942～1982年頃の改造前の推定立面図（以下、「推定立面図」という）、下段は現状立面図である。両図により建具の改造がファサードに与えた影響を確認し、今後の保存整備のあり方を検討することを目的とする。推定立面図は以下の基準で作成した。鋪板門型は各棟において間ごとの扉位置が揃うとは限らず、向かって右側に扉を設ける間と左側を扉とする間が混在する場合があるが^{注27)}、推定立面図では改造前の扉位

改造前推定立面図（1942年～1982年頃）

現状立面図

建具開放時の開口部

図4 立面図

置が確定できなかったため、暫定的に各間の南側に扉を設けた。現存する鋪板門型の腰板には1または2本の縦棧が設けられているが、改造前の腰板の詳細は確定できなかったため、暫定的に中央に1本の縦棧を設けた。また、1間に腰板付き窓のみが設けられている場合は暫定的に2本の縦棧とした。営業時の鋪板門型と全屏開放型の建具を設けた商店建築を観察すると、鋪板門型は窓板を外したうえで扉を開き、全屏開放型は全ての扉が外されることが多いため、推定立面図では扉と窓の部分を開口部とし、営業時の外観を表した。建具以外でファサードに大きな影響を与える改造、破損などが東1号の2階建具と屋根に見られるため、現状に残る当初の形状とした。

現状立面図より、解放前に建設された6棟の合計25間において、8間が鋪板門型、17間が全屏開放型である。大研古城の四方街では解放前は鋪板門型であったが、徐々に全屏開放型に改造され現状では鋪板門型は残っていない^{注28)}。東河は世界遺産登録前には鋪板門型が多く残っていたが、全て全屏開放型となった^{注29)}。2地区の状況を考えると白沙の鋪板門型は稀少であり、適切な保存が求められる。

扉を外せば建物1階ファサードの大部分が開口部となり室内が外部へ開かれる全屏開放型の特徴を開放的とすると、6割程度の開口部である鋪板門型の特徴は閉鎖的といえる。鋪板門型であったときの閉鎖的な景観は、全屏開放型に改造されることにより大きく失われることになる。

四方街における保存整備計画の方針としては、現存する鋪板門型の伝統的建造物を維持保存し、全屏開放型への改造を禁止すると

もに、すでに全屏開放型に改造されてしまった店舗ファサードの今後については、鋪板門型への復旧を整備の基本方針とすることが考えられる。もちろん歴史的建造物及びその町並みの保存において安易な復旧整備は推奨されるものでないが、世界遺産としての麗江の特徴が、麗江が交易中継地として大きく発展した中華民国時代の鋪板門型を中心とする閉鎖的な商店街の町並みにあること、麗江にはそうした歴史的な外観を保存している地域はすでに失われてしまっていることを考えれば、鋪板門型がまだ残されている四方街において、残された伝統的建造物を軸に鋪板門型の閉鎖的な町並みの再現を行っていくことは、意義があると考えられる。なお実際の整備においては、形状、材料、工法および他の地域の鋪板門との比較等について更なる調査分析が必要であり、それらを基にできる限り実証的に再現することが重要である。

3.5 鋪板門型の店舗としての利用の可能性

全屏開放型は扉を外すことにより集中した客の入室を円滑にすることができる。この開放性は観光客数の多い大研古城の店舗で全屏開放型が普及した要因の一つに考えられるが、白沙四方街の店舗では客の集中は少なく、全屏開放型を用いる必要性は高くない。前節では鋪板門型への整備について両建具が設けられたファサードの特徴の相違と形状から検討したが、ここでは使われ方から鋪板門型に復原する問題と可能性を確認する。

全間が全屏開放型に改造された西1～3号は住民向け小売店とし

て使用され、室内に陳列用のガラスケースが設置されている(図5)。陳列ケースから建具まで客が踏み込む奥行きは西1号では1m程度であるが、西3号では2m以上ある。西2号では陳列ケースを開口部と直角に設置している。西1号では内部配置の見直しが必要であるが、西2、3号では鋪板門型の設置に大きな問題はない。

中央の1間のみを全屏開放型とする西4号、西5号は観光客向け飲食店となっている。観光客向け飲食店では全屏開放型の建具を開放し、道路側のテラスと室内を一体化させた使用が多く見られる。西5号は客用スペースと集客数では白沙四方街の中で最も大規模な観光客向け飲食店であり、鋪板門型である両脇1間を全屏開放型に改造する可能性は高いが、現状では全屏開放型部分は主にテラスへのテーブルセットの出し入れに使われている(図6)。西4号も同様である。鋪板門型の扉の開口幅は650~750mm程度であり十分な広さでないが、家具の大きさや搬出入経路の見直しにより、使用形式に大きな支障を及ぼさずに建具の復元は可能と考えられる。

東1号は間口3間の合院式住宅が一般である麗江において例外的な建物であるが、9間中4間が鋪板門型である。鋪板門型が残るのは、住居である東1号-1や修理機材を室内に収納している東1号-5など室内を外部へ開放する必要のない場合と2間を連続して使用しているため鋪板門部分を主な出入りに使用していない東1号-3などである。全屏開放型の必要性は、室内の楽団員が外部に向けて座り四方街の客に対し演奏する東1号-6、大型肥料袋の出し入れをする東1号-9に見られる。東1号における鋪板門型への復元整備は、各間で異なる利用者の要求に応じた建具の選択と歴史地区の保存を如何に協調させるかが問題となる。

図5 西3号の使用形式

図6 西5号の使用形式

4 まとめ

本稿で明らかにした結果は以下にまとめられる。

四方街に面する建物は1940年代初めにほぼ現状の配置となった。中華民国時代にはその一部が店舗として利用され、周辺村落の住民にとって唯一の商店街であった。店舗経営は農業との兼業で行われ、客は日用品や食品を求める住民が主であり、白沙四方街は人の集まりが大研古城のように多くない静かな村落の一部であった。

現在の四方街は白沙の中でも観光客が集まる地域の一部を構成しているが、営業の対象者を住民とする店舗が全体の半分を占め、所有者自身の経営や居住も多い。賃貸される場合、借り主は近郊住民である。白沙四方街では住民生活の場が比較的維持されている。

白沙四方街には大研古城や東河の四方街では見られなくなった鋪板門が残っている。四方街に面する建物が建設された当初は建物1階ファサードに鋪板門が設けられていた。1980年代以降は徐々に開放的な全屏開放型に改造されてきたが、改造は1997年麗江旧市街の世界遺産登録後に増加している。

更に、四方街に面する全建物の改造前の推定立面図を提示し、鋪板門型から全屏開放型への改造を禁止し、鋪板門型を中心とする従来の店舗の町並みへと整備する保存整備計画の基本方針を提案した。また現状の店舗の使われ方を確認することにより、大きな制約を受けずにこれを行うことは可能であることを示した。

全屏開放型は比較的新しい形状であるが、世界遺産管理組織が作成した伝統的民家の修復手引書では、鋪板門型と同様に伝統的な建具とされている。行政文書である修復手引書において両方の建具を共に伝統的としていることが鋪板門型から全屏開放型への改造による伝統様式の変化や損失を認識しにくくする要因となっており、伝統様式や構法が一般的な地域においても民家遺産の経年的形状の変化を注意深く観察することの重要性を示している。鋪板門は確実に減少しており、歴史的なファサードを地域固有の文脈の中で遺産として伝えるには、保存計画の中に価値を明示し、適切な整備と改造の禁止等について策定することが必要である。

地元の住民向け店舗であることが鋪板門の存続に直接的な影響を与えていると証明することは難しいが、住民生活の場が維持されている四方街の環境は、個々の住民が必要に応じて鋪板門の維持や改造を選択することを可能にし、大研古城や東河の四方街に見られる急速なファサードの変化がなかった要因の一つとも考えられよう。白沙四方街に面する現存する建物が建設された中華民国時代は人の集まりは多くなく、歴史的な背景を考慮した保存を考えれば、四方街や商店建築が許容できる人数もこれに見合うものとなる。周辺農地の開発により観光地としての規模を拡大するのではなく、住民生活の場の中で遺産を継承し、世界遺産地としての発展を遂げる手法の実施が求められる。

謝辞

現地調査では白沙住民の方々のご協力を得た。当時勤務していた雲南大学旅遊文化学院(麗江)職員・張祥氏には納西語の通訳を3日間お願いした。ここに記して感謝いたします。

注

- 注1) 「The Old Town of Lijiang」が公式の英語名称。中国では「麗江古城」である。本稿では日本で一般的に使用されている麗江旧市街を用いる。3地区の英語名称はDayan Old Town、Baisha housing cluster、Shuhe housing cluster、中国語名称は大研古城、白沙民居建築群、東河民居建築群となっている。本稿の白沙、東河は上記の保護区に周辺村落を含んだ地域とする。
- 注2) 中国が作成した世界遺産推薦書は参考文献1)。世界遺産審査におけるイコモス評価書は参考文献2)。
- 注3) 参考文献3)は第31回世界遺産委員会議事録の中の麗江旧市街の保全状況審査に関する内容。保全状況審査とは記載物件の問題を示し、当該国に報告と改善を要請するもの。

注 4) 視察は 2008 年 1 月に実施された。参考文献 4) はその報告書。

注 5) 本稿では遺産の価値を維持していくこと全般として「保存」という語を用いる。また、建築物の改造を受けた部分をもとの形状に再現しようとする試みを「復原」とする。

注 6) 麗江における短期間の現地調査は 2004 年 8 月より実施している。2007 年 10 月～2008 年 7 月は麗江にある雲南大学旅遊文化学院外語系教諭として長期滞在し、白沙での現地調査は通算 30 日程度行った。

注 7) 参考文献 5) ～7)。白沙四方街北に位置する街尾村の民家の調査分析により実態と変遷を明らかにしている。当該調査時期においては、2003 年より東河で始まった歴史地区に隣接する大規模観光地開発と同様の開発が白沙へ及ぶことの懸念が指摘されたが、そうした開発は行われていない。

注 8) 麗江の民家研究の中で白沙四方街にふれたものは、例えば参考文献 8) pp. 87-88。詳細は読み取れないが 1980 年頃の周辺図がある。なお、図と図名は白沙と東河が入れ替わっている。参考文献 9) は世界遺産推薦準備として行われた調査研究が出版されたもので、登録前の屋根伏図 (p. 118) がある。

注 9) 参考文献 10)。「観光地化が世界遺産都市・麗江に与える空間的・社会的インパクトに関する研究(その 1～15)」として発表されたもののひとつ。参考文献 9) にある世界遺産登録前のファサードと 2004 年調査時を変更位置のみを比較しているが、歴史的な変遷については述べられていない。その他の一連の研究である参考文献 11) は、大研古城のゲストハウスに利用されている民家は従来の住民が関与した方が伝統的な位置の使用が継承されていることを明らかにし、近年の麗江関連の研究と行政の動向が簡潔にまとめられている。

注 10) 参考文献 12)。西安市四合院民家の過密居住による住環境の悪化と町並みへの影響を明らかにし、別稿にて道路に面する門房の保存状態が良好であることに着目した高度斜線の設定を提案している。

注 11) 参考文献 13)。

注 12) 参考文献 5) ～7) では四方街を南北に通る道路の正式名称が確定できず、一般的な白沙にある街路の意味として白沙街を用いた。本稿では論点である四方街広場との類似を避けるため白沙通りとした。

注 13) 中国建築において、「間」は建物の柱間数を示すときに用いられる。調査の詳細は参考文献 5) を参照されたい。

注 14) 保護民居は世界遺産申請中に公布された麗江政府による指定文化財の民家。保護民居の建設年代等の解説は参考文献 14) (麗江政府内部資料)。

注 15) 参考文献 15) p. 3。歴史文献では雲南とチベットを結ぶ道(滇藏道)に「茶馬道」という名称があり、木霽弘は 1988 年中旬県の資料で「茶馬之道」を用いた。木らは 1990 年に踏査し、1992 年に出版された著書で雲南の歴史上の対外道路の総称を「茶馬古道」とした。(筆者要約)

注 16) 現状の白沙通りは全面舗装であるが、開取りによるとそれ以前は四方街南の街尾村側は中央のみ石敷き、北の三元村側は未舗装であり、「吉祥橋－四方街－大研古城」という経路があったことを裏付けている。

注 17) 表 1、注 3)、b)の開取り対象者 B および 40 才代の白沙在住福国寺管理人が両親から聞いた内容が一致。

注 18) 大研古城の記述は参考文献 9)、16) など。参考文献 16) は 1940 年代に大研古城に居住した Perter Goullart による『Forgotten Kingdom』(1957) が原文と中国語訳で近年同時出版されたものであり、中華民国時代の麗江研究に必須な文献となっている。写真は以下にある。約瑟夫・洛克著、劉宋岳ほか訳、宣科主編『中国西南の古納西王国』雲南美術出版社, p. 31, 1999. 4 (原書は 1920～1940 年代に麗江に滞在した Jhoseph F. Rock による『The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China』(1947))。

注 19) 開取り対象者 A、C 他。

注 20) 開取り対象者 A、四方街南手の街尾や忠義、北手の豊楽村の住民。

注 21) 麗江世界遺産管理組織の建築部門専門家への開取りによる。なお、中国では商店の店先を意味する「舗面」という語があり、建具名称に用いられることもある。

注 22) 舗板門は柱間の足元を横木(地脚)で固め、床上 2500mm 程度の高さに楣を渡し、柱付きに 100～150mm の袖壁を立てる。そこから 650～750mm の扉幅をとり、その横に幅 130～150mm の方立を立てる。開口高さは地脚上端から 1700mm 程度、その上部に扉上枠を設ける。扉は一枚板や数枚の継ぎ板で楣と扉上枠の間には小壁板を貼る。窓下の腰壁高さは 900～1100mm、室内側の窓枠上下に溝が設けられ、2～4 枚の板を扉側から差込み窓を閉める。

注 23) 全扉開放型は柱間の足元に地脚、床上 2500mm あたりに楣を渡し、柱付きに 100～150mm の袖壁を立てる。6 枚扉は開口部の 6 等分、4 枚扉は 4 等分が扉幅で、6 枚扉は 450～500 mm、4 枚扉は 500 mm 以上が多い。扉の開閉は内開き、袖壁側とそこから扉 2 枚ごとに地脚と楣に扉軸が差し込まれる溝が彫られ添え木で補強される。改造や近年のものは地脚の上に敷居を載せている。

注 24) 参考文献 17)。本書は一般書店で販売されている。全扉開放型の主に 6 枚の扉を有するものを六合門と呼んでいる。また、扉板に精細な彫刻を施さないことが規定されている。

注 25) 中庭に面する建具は、参考文献 8) では「六扇或四扇彫花格子門」など一般的な名称となっているが、参考文献 14) では六合門とされている。大研古城の保護民居で最も古いものは「清末清初」の建設とされ、中庭に面する外壁にこの形状の建具が設けられている。

注 26) 鈴木喜一『中国民家探訪辞典』東京堂出版, p. 109, 1999

注 27) 参考文献 9) 複数項に掲載されている大研古城における世界遺産登録前の街路沿い建物の連続立面図で確認。

注 28) 同 pp. 120-121 (図)。大研古城在住の 80 才代女性等の証言。

注 29) 同 p. 118(図)。東河在住の 80 才代男性等の証言。

参考文献

- 1) 中華人民共和国建設部：中国麗江古城，1996
- 2) ICOMOS: World Heritage List Lijiang (China) No811, 1997, http://whc.unesco.org/archive/advisory_body_evaluation/811.pdf (参照 2009. 9. 5)
- 3) UNESCO: WHC-07/31.COM/24(Decision:31COM7B.69), p. 92, 2007, <http://whc.unesco.org/document/9192> (参照 2009. 9. 5)
- 4) UNESCO, ICOMOS: UNESCO WHC-ICOMOS Reactive Monitoring Mission to the Old Town of Lijiang, 2008, <http://whc.unesco.org/document/10058> (参照 2009. 9. 5)
- 5) 河原洋子：街尾村白沙街沿い民家の分析－中国世界遺産麗江旧市街白沙集落において－，日本建築学会計画系論文集，第 619 号，pp. 251-256, 2007. 9
- 6) 河原洋子，清水真一：街尾村白沙街沿い民家の街路景観分析－中国世界遺産麗江旧市街白沙集落において－，日本建築学会大会学術講演梗概集，F1 分冊，pp. 425-426, 2006
- 7) 河原洋子：街尾村白沙街沿い民家の街路景観変化 2005－2008，日本建築学会大会学術講演梗概集，F2 分冊，pp. 753-754, 2008
- 8) 雲南省設計院《雲南民居》編写組：雲南民居，中国建築工業出版社，1986. 6
- 9) 蔣高宸編著：麗江－美麗的納西家園，中国建築工業出版社，1997. 10
- 10) 金世峰ほか：麗江旧市街地の伝統的建築物のファサード変容に関する考察－観光地化が世界遺産都市・麗江に与える空間的・社会的インパクトに関する研究 その 6－，日本建築学会大会学術講演梗概集，F1 分冊，pp. 597-598, 2005
- 11) 藤木庸介，柏原晋，山村高淑：観光地化が伝統的民家の使用に及ぼす影響について－世界遺産都市・中国雲南省麗江旧市街地を事例として－，日本建築学会計画系論文集，第 629 号，pp. 1499-1506, 2008. 7
- 12) 大西國太郎ほか：中国・四合院民居地区における集住空間と町並み景観の変化に関する研究－西安市・徳福巷地区のケーススタディ，都市計画，v191, pp. 97-105, 1994. 11
- 13) 内海佐和子ほか：史跡保存地区における町家のファサードの変化－ヴェトナム・ホイアン の町並み保存に関する研究 その 2－，日本建築学会計画系論文集，第 542 号，pp. 129-135, 2001. 4
- 14) 雲南省城郷規劃設計研究院，麗江県城建局：麗江大研古城保護詳細規劃・説明書，1997. 10
- 15) 夫巴主編：麗江與茶馬古道，雲南大学出版，2004. 4
- 16) 顧彼得：被遺忘の王国，雲南人民出版社，2007. 8 (李茂春訳『被遺忘の王国』雲南人民出版社，2007. 8)
- 17) 世界文化遺産麗江古城保護管理局，昆明本土建築設計研究所：麗江古城伝統民居保護維修手冊，雲南科技出版社，2006. 4

(2009 年 9 月 7 日原稿受理，2010 年 2 月 4 日採用決定)